現代日本紀行文学全集

写真編

ほるぷ出版

現代日本紀行文学全集　写真編

監修　志賀直哉
　　佐藤春夫
　　川端康成
　　小林秀雄
　　井上靖

発行日　昭和五一年八月一日発行

発行所　東京都新宿区新宿二―一九―一三
電話　東京〇三―三五四―七〇三一（代）
株式会社　ほるぷ出版
代表　山浦喜三夫

総発売元　東京都新宿区新宿二―一九―一三
電話　東京〇三―三五六―六二一一（代）
株式会社　ほるぷ
代表　中森蒔人

制作　東京連合印刷株式会社

NDC 915.8 194 mm×138 mm p. 315　52.1

目次

〔北海道〕
熊の足跡　徳富蘆花　1
北海道遊記　宇野浩二　2
東海の小島の思ひ出　亀井勝一郎　3
北海道紀行　桑原武夫　4
千歳線風景　伊藤整　5
空知川の岸辺　国木田独歩　6
札幌まで　小宮豊隆　8
雪中行　石川啄木　9
東旭川村にて　島木健作　10
太古の国の遍路から　金田一京助　11
摩周湖紀行　林芙美子　12
日高十勝の記憶　岩野泡鳴　14
ハボマイ紀行　火野葦平　15
オホーツクの海と日高の海　草野心平　16
網走　八木義徳　17
天塩の原野に沈む月　武田泰淳　18
〔青森〕
津軽の旅　柳田国男　19
津軽半島より　安倍能成　20
山上の池沼　深田久弥　22
恐山半島記　佐藤春夫　23
雪の下北半島紀行　井上靖　24
みちのくの旅　野上弥生子　25
〔秋田〕
遊行離記　幸田露伴　26
十和田湖　泉鏡花　27
十和田湖　大町桂月　28
をがさべり　柳田国男　29
横手の雨　奥野信太郎　30
日本海の波　久保田万太郎　31
〔岩手〕
豆の葉と太陽　柳田国男　32
清光館哀史　柳田国男　33
久慈街道　井伏鱒二　34
みちのく便り　高村光太郎　35
花巻温泉　高村光太郎　36
陸奥紀行　吉井勇　37

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

遠野物語　柳田国男　38
みちのくの牧歌　串田孫一　39
中尊寺を観るの記　長与善郎　40
旅信　安倍能成　41

〔宮城〕

三陸廻り　高村光太郎　42
石巻　臼井吉見　43
仙台から金華山へ　田山花袋　44
松島秋色　滝井孝作　45
松島に於て芭蕉翁を読む　北村透谷　46
山形　志賀直哉　47

〔山形〕

最上河　阿部次郎　48
羽後の海岸　田山花袋　49
「奥の細道」の杖の跡　井伏鱒二　50

〔福島〕

勢至堂峠から白河へ　柳田国男　51
中の沢温泉　河上徹太郎　52
保成峠　大岡昇平　53
磐梯高原の熊　由起しげ子　54
はて知らずの記　正岡子規　55
甲子温泉行　結城哀草果　56

〔東京〕

日和下駄　永井荷風　57
水の東京　幸田露伴　58
隅田川の諸橋　木下杢太郎　59
千代田城　亀井勝一郎　60
武蔵野　国木田独歩　61
高尾紀行　正岡子規　62
大島行　林芙美子　63
小笠原紀行　小林秀雄　64

〔千葉〕

房総鼻眼鏡　内田百閒　65
犬吠岬紀行　吉田絃二郎　66
九十九里浜の初夏　高村光太郎　67
松風日記　大和田建樹　68

〔茨城〕

土浦の川口　長塚節　69

潮来十二橋　水原秋桜子　70
真菰の中　久保田万太郎　71
水郷めぐり　若山牧水　72
筑波遊記　徳富蘇峰　73
うつしゑ日記　幸田露伴　74

〔栃木〕

塩原日記　岩野泡鳴　75
日光　田山花袋　76
那須より会津へ　田部重治　77
華厳滝　幸田露伴　78
紅葉の旅　大町桂月　79

〔群馬〕

焚火　志賀直哉　80
焚火　志賀直哉　81
赤城行　尾崎一雄　82
みなかみ紀行　若山牧水　83
草津温泉　志賀直哉　84
浅間登山記　正宗白鳥　85
伊香保　寺田寅彦　86
榛名　横光利一　87

〔埼玉〕

写生紀行　寺田寅彦　88
或る田舎町の魅力　吉田健一　89
妻坂越　河井酔茗　90

〔神奈川〕

游奏野記　柳田国男　91
ふところ日記　川上眉山　92
鎌倉一見の記　正岡子規　93
滑川畔にて　嘉村礒多　94
剣崎沖の風　幸田露伴　95
湯ヶ原ゆき　国木田独歩　96
熱海まで　幸田文　97
不二の高根　遅塚麗水　98
箱根の山々　近松秋江　100

〔静岡〕

私の伊豆　川端康成　101
海郷風物記　木下杢太郎　102
初島紀行　与謝野晶子　103

伊豆の旅　島崎藤村　104
豆北豆南　蒲原有明　105
万葉紀行—田児の浦　土屋文明　106
清見潟日記　高山樗牛　107
東海道五十三次　岡本かの子　108
清見潟の一夏　姉崎嘲風　109

〔山梨〕

山中湖畔野鳥行　川端康成　110
道学先生の旅　戸川秋骨　111
湖水めぐり　野上豊一郎　112
富嶽百景　太宰治　113
富士山　小泉八雲　114
甲斐わかひこ路　井伏鱒二　115
木枯紀行　若山牧水　116

〔愛知〕

秋風帖　柳田国男　117
峯山の故郷　笹川臨風　118
遊海島記　柳田国男　119
伊良湖の旅　吉江喬松　120
日本ライン　北原白秋　121
白帝城　北原白秋　122

〔岐阜〕

飛騨の風景　滝井孝作　123
飛騨の顔　坂口安吾　124

〔長野〕

雨の上高地　寺田寅彦　125
明神池　窪田空穂　126
焼ケ岳　尾崎一雄　127
槍ケ岳紀行　芥川竜之介　128
かけはしの記　正岡子規　129
木曽路　石田波郷　130
山峡小記　斎藤茂吉　131
天竜川　小島烏水　132
天竜川を下る　和辻哲郎　133
御所平と信州峠　尾崎喜八　134
秋風の吹く頃に　柳田国男　135
富士見高原　田宮虎彦　136
蓼科高原　片山敏彦　137

霧ケ峰から鷲ケ峰へ　徳田秋声　138
みちの記　森鷗外　139
山を想ふ　水上滝太郎　140
信濃日記　有島武郎　141
軽井沢にて　正宗白鳥　142
浅間山麓より　谷川徹三　143
雉子日記　堀辰雄　144
鳥帽子山麓の牧場　島崎藤村　145
豊年虫　志賀直哉　146
続山峡小記　斎藤茂吉　147
カヤの平　小林秀雄　148
志賀高原　三好達治　149
戸隠行　高浜虚子　150
北信早春譜　野上豊一郎　151
湖畔　中村草田男　152
霧の旅　吉江喬松　153
針ノ木峠　長谷川如是閑・河東碧梧桐　154
『更科紀行』の跡　荻原井泉水　155

〔新潟〕

弥彦山　長塚節　156
佐渡まで　尾崎紅葉　157
佐渡一巡記　柳田国男　158
佐渡ケ島　吉井勇　159
大佐渡小佐渡　井上靖　160
親不知、子不知　深田久弥　161
煙霞療養　尾崎紅葉　162

〔富山〕

富山の薬と越後の毒消し　坂口安吾　163
だいらの小屋　安倍能成　164
四月の山の手帖から　浦松佐美太郎　165

〔石川〕

北越の夏　阿部次郎　166
万葉紀行　土屋文明　167
郷里へ来て　徳田秋声　168
金沢行　長谷川如是閑　169

〔福井〕

北陸の旅　吉田絃二郎　170
栃の実　泉鏡花　171

若狭道　田山花袋　172
旅日記　二葉亭四迷　173

〔三重〕

月ケ瀬紀行　櫻庭篁村　174
伊勢の的矢の日和山　壺井栄　175
伊賀　近江秋江　176
横山　高浜虚子　177

〔滋賀〕

湖光島影　近松秋江　178
山中雑記　安倍能成　179
二銭紀　内田百閒　180
比叡　横光利一　181
湖畔の秋　馬場孤蝶　182
紅葉狩　徳富蘆花　183
関の藤川　新村出　184
関ケ原百里　尾崎士郎　185

〔京都〕

京に着ける夕　夏目漱石　186
早春の旅　志賀直哉　187
朱雀日記　谷崎潤一郎　188
十年振　永井荷風　189
京都　蒲原有明　190
京洛日記　室生犀星　191
京の四季　和辻哲郎　192
西京遊記　広津和郎　193
巨椋池の蓮　和辻哲郎　194
宇治　福原麟太郎　195
北国紀行　柳田国男　196
橋立遊記　長与善郎　197

〔奈良〕

奈良の旅　安倍能成　198
十月　堀辰雄　199
白い砂土道　里見弴　200
夢殿の救世観音　広津和郎　201
飛鳥　薄田泣菫　202
乗馬靴　会津八一　203
吉野の山　亀井勝一郎　204
『野晒紀行』の跡　荻原井泉水　205

奈良より　島村抱月　206
葛城山の雨　幸田露伴　207

〔和歌山〕

遍路　斎藤茂吉　208
熊野路の旅　柳田国男　209
洗塵紀行　佐藤春夫　210
高野山の春雪　佐藤春夫　211

〔大阪〕

京阪聞見録　木下杢太郎　212
木のない都　宇野浩二　213
栴檀木橋　正宗白鳥　214
新清水寺　荻原井泉水　215
大阪の夕　寿岳文章　216
泉州行脚　長谷川如是閑　217

〔兵庫〕

須磨明石　長塚節　218
淡路　野田宇太郎　219
城の崎にて　志賀直哉　220
山陰の風景　木下利玄　221

〔鳥取〕

山陰土産　島崎藤村　222
日本海に沿うて　小泉八雲　223
鳥取　志賀直哉　224

〔島根〕

松江印象記　芥川竜之介　225
二葉亭研究の旅　中村光夫　226
隠岐島　火野葦平　227
小泉先生の旧居を訪ふ　厨川白村　228

〔山口〕

三人旅の記（山口から岩国まで）　井伏鱒二　229
三人旅の記（下関より萩まで）　河上徹太郎　230
三人旅の記（萩から山口まで）　三好達治　231
山口付秋芳洞　河上徹太郎　232

〔広島〕

広島日記　佐藤春夫　233
広島風土記　井伏鱒二　234
暗夜行路の尾道　中村光夫　235

〔岡山〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

玉島円通寺　吉井勇　236
山遊び　木下利玄　237
備前街道　井伏鱒二　238
〔愛媛〕
瀬戸内海縦断の旅　阿川弘之　239
初旅の残象　安倍能成　240
内海点描　吉井勇　241
南予枇杷行　河東碧梧桐　242
四国から近江路へ　小杉放庵　243
島二題　若山牧水　244
東京から四国への道　獅子文六　245
海南小記　吉井勇　246
四国四話　大内兵衛　247
〔高知〕
土佐　安倍能成　248
高知　安倍能成　249
岬の僧坊にて　上林暁　250
海南雑記　吉井勇　251
大隅国喜界島　辻村太郎　252
土佐の和紙村　壺井栄　253
〔徳島〕
徳島見聞記　佐藤春夫　254
にはかへんろ記　久保田万太郎　255
〔香川〕
琴平　宮本百合子　256
四国の旅（通信）　柳田国男　257
〔福岡〕
九州の旅　長与善郎　258
豊前鏡山　土屋文明　259
水郷柳河　北原白秋　260
帰省　宮崎湖処子　261
対馬　火野葦平　262
〔佐賀〕
有田紀行　火野葦平　263
松浦あがた　蒲原有明　264
からのみなと　保田与重郎　265
〔長崎〕
筑紫雑記　吉井勇　266

海洋の旅　永井荷風　267
今昔の長崎　宇野浩二　268
長崎再遊　新村出　269
再遊長崎　佐藤春夫　270
考史遊記　桑原武夫　271
長崎の印象　宮本百合子　272
南国巡礼　新村出　273
雲仙　野上弥生子　274

〔熊本〕

五足の靴　鉄幹・白秋・本太郎・勇・万里　275
天草の春　長谷健　276
山里　阿部知二　277
久恋の地山鹿温泉　尾崎士郎　278

〔大分〕

小国　高浜虚子　279
耶馬渓の一夜　田山花袋　280
由布院行　中谷宇吉郎　281
佗しい放浪の旅　徳田秋声　282

〔宮崎〕

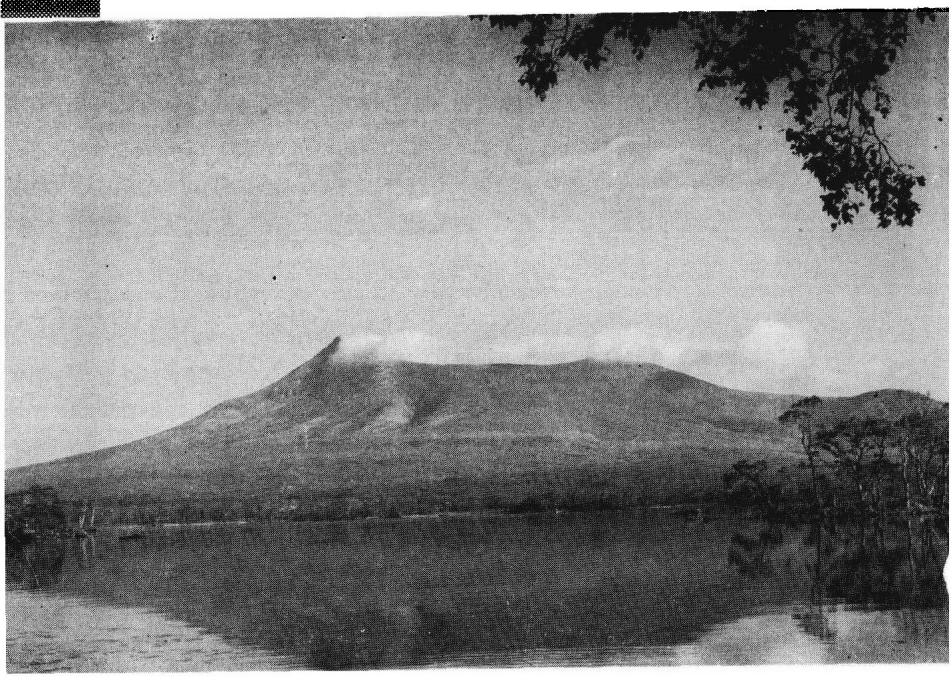
日向路　野田宇太郎　283
高千穂日記　尾崎士郎　284
国見ヶ丘にて　尾崎士郎　285

〔鹿児島〕

八月の霧島　吉田絃二郎　286
屋久島紀行　林芙美子　287
南国紀行　斎藤茂吉　288
佐多岬紀行　井上靖　289
海南小記抄　柳田国男　290

〔沖縄〕

沖縄の旅　浜田青陵　291
沖縄の一週間　井上靖　292
かけあし撮影紀行—私の歩いた道　大竹新助　293



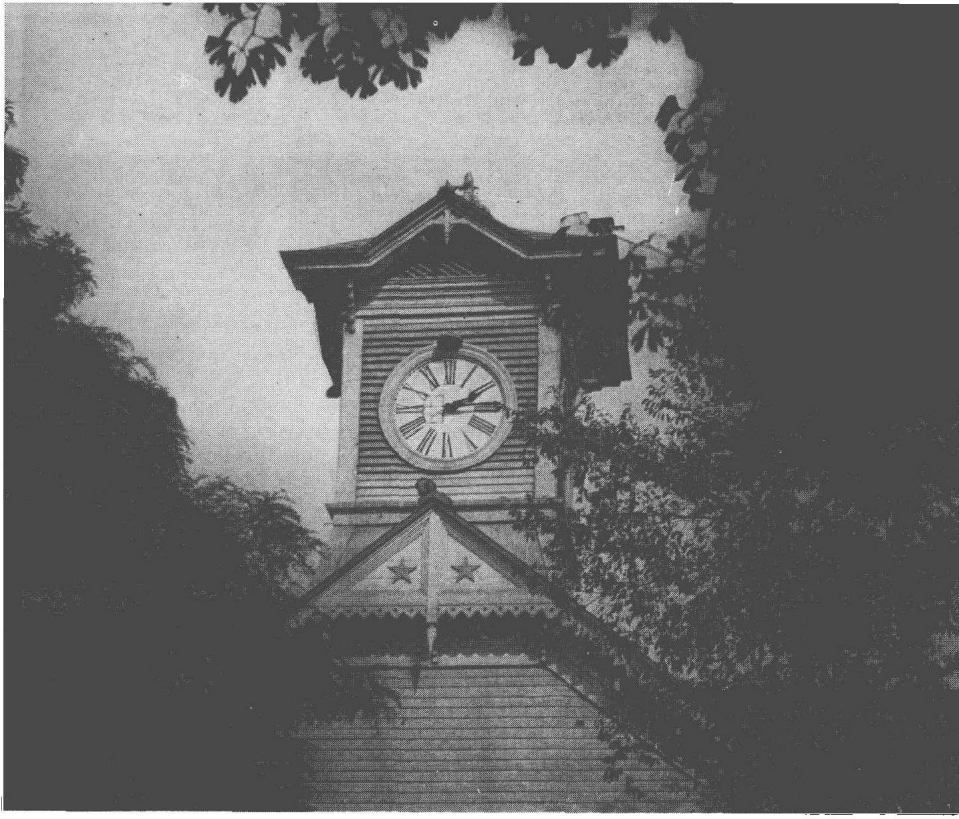
大　沼

熊の足跡　徳富蘆花

函館から一時間余にして、汽車は山を上り終へ、大沼駅を過ぎて大沼公園に来た。遊客の為に設けた形ばかりの停車場である。ここで下車。宿引が二人待つて居る。余等は導かれて紅葉館の旗を艫に立てた小舟に乗つた。宿引は一礼して去り、船頭は軋と櫓声を立てて漕ぎ出す。

黄金色に藻の花の咲く入江を出ると、広々とした沼の面、絶えて久しい赤禿の駒が岳が忽眼前に躍り出た。東の肩からあるか無いかの煙が立上つて居る。余が明治三十六年の夏来た頃は、汽車はまだ森までしかゝつて居なかつた。大沼公園にも粗末な料理屋が二三軒水際に立つて居た。駒が岳の噴火も其後の事である。然し汽車は釧路まで通うても、駒が岳は噴火しても、大沼其ものは旧に仍つて晴々した而して寂かな眺である。時は九月の十四日、然し沼のあたりのイタヤ楓はそろそろ染めかけて居る。

（北日本編四一五頁）



時計台

北海道遊記　宇野浩二

しかし、その大通りを北にすすんで、しばらく行つて、右にまがつた角にある、『時計台』のまへに立つた時、私は、札幌には、やはり、いい物があるな、と思つた。これは、正に、私がもとめてゐた『詩』である。建て物は、小さく、古びてゐて、貧弱なやうに見えるけれど、前にたたずんで眺めると、風雅で、何ともいへぬ趣きがある。階下は図書館になつてゐるが、上に塔があつて、その塔が時計になつてゐるのである。これは明治十四年に装置されたもので、自鳴鐘がついてゐる。私が、その緑色のアカシヤにつつまれた、ロシア風の建て物の前に、しばらく見とれて立つてゐた時、ちやうど、その時計の鐘がカラン、カランといふやうに聞こえる音をたてて、鳴りだした。（牧水に『かたはらに秋草の花かたるらくほろびしものはなつかしきかな』といふ歌があるが、これは、ほろびない、なつかしい、時計台である。）　（北日本編三七頁）

函館山から函館市街をのぞむ

東海の小島の思ひ出　亀井勝一郎

函館山は一名臥牛山といふ。北方正面からみると、ちやうど牛が臥せてゐるやうな形をしてゐるところからこの名称が出来た。臥牛山は高さ三百米ほどで、東海の小島の山であり、函館はつまりその山麓にひろがつた町なのである。この山は明治以来ずつと要塞であつたので、当然登ることは許されなかつた。今度の敗戦で、実に久しぶりで解放されたのである。この山へ登ることは、幼年時代からの私のあこがれであつた。終戦後まだ一度も帰省してゐないので、未だ登る機会はないが、それだけに空想は大きい。今度帰つたら真先に登つてみたいと思つてゐる。

山頂に立てば、津軽海峡はむろん、松前の山々も、恵山も、横津岳も駒ケ岳も、町も港も、つまり北海道の南端全体が一望のもとに眺められる筈である。要塞であつたため、自動車道路もひらけ、徒歩では三十分ほどで山頂に達するといふ。

（北日本編四九頁）

北海道紀行　桑原武夫

夜、土産物屋のはげしい電灯の光をうけて、みすぼらしいモンペ姿のアイヌの老婆が杖にすがり、口のまわりに入墨した恐ろしげな顔をしてたたずんでいたのは、亡びゆく人種の無意識的なうらみの象徴のようで、正視にたえなかった。

この辺の原始林はうっそうと茂っているが、内地の森のように暗い感じがしない。お化けが出そうな感じは全くない。もしお化けが出るとしたら、どんなものだろうかと考えた。少なくともそれは日本の古典的化け物ではありえない。

その原始林の中を走るバス道路のわきに、ところどころ石の地蔵が見える。この昭和六、七年ごろの難工事は、どうせ監獄部屋システムによったのだろうが、この山の中で酷使されて死んだ人々のために親分が罪ほろぼしに立てたのかと想像した。

（北日本編二三頁）

阿寒の原始林にねむるペンケトウ・パンケトウ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co